

論文

「改善要求発話」の構成要素に関する日中対照

—認知言語学的アプローチから—

A Contrastive Study of Japanese and Chinese “Making Demands”:
The Viewpoint of Cognitive Linguistics

李 国玲 (Guoling LI)

筑波大学大学院人文社会科学研究所国際日本研究専攻 博士後期課程

本稿では、自由記述型談話完成テストにより収集した改善要求発話を「切り出し部」「用件内容部」「終了部」の3つの部分に分け、ピリヤードボール・モデルを援用し、改善要求発話の談話構造を分析した上、「因果連鎖」と「事態把握」という二つの認知的アプローチから、日中間の類型論的特性を考察した。さらに、その考察結果に基づき、これまで着目されてこなかった認知とポライトネスの接点から、日中間の配慮の仕方の相違と認知レベルでの営みとの関連性を検討した。その結果、改善要求発話の各部分に用いる配慮の仕方が、日中両言語とも一見異なる表現形式で表しているようであるが、その深層において、日本語は話者自身の感情活動を事態に注ぎ込んだ「主観的把握」、中国語は事態そのものを重視した「客観的把握」、といった認知レベルでの共通性があることが明らかになった。

The present paper discusses the typological characteristics of Japanese and Chinese “making demands” from the viewpoint of ‘causal chain’ and ‘construal’. We collected the data through a test called the ‘Discourse Completion Test’. The discourse then could be divided into the following parts, namely, ‘the beginning part’, ‘the key part’ and ‘the finishing part’. From the viewpoint of ‘the relevance of politeness and cognition’, which has not been noted heretofore, we found that in both Japanese and Chinese, the expressions and the ways of consideration in one part are different from that in another. That is, they are connected by the ‘construal’ which works at the cognitive level. The Japanese speakers would like to use the ‘subjective construal’ while the Chinese speakers prefer the ‘objective construal’. In this way, we can get some insight into the differences in cognitive level resulting in individual ways of making politeness between Japanese and Chinese.

キーワード：認知 ポライトネス 因果連鎖 事態把握 類型論的特性

Keywords: Cognitive, Politeness, Causal Chain, Construal, Typological Characteristics

はじめに

「改善要求」とは、「現状に不満や不快感を感じている話者が、その好ましくない状況を引き起こした当事者の聴者に何らかの改善行為を行うように頼む行為である」(李 2014:137)。字面が示す通り、改善要求発話の究極的な目的は好ましくない現状を改善してもらうことである。この目的を達成するためには、様々なストラテジーが用いられる。例として、隣に住んでいる人が夜遅くまで大声で話している場合に、相手に何か言うとしたら、様々な発話が可能であろう。以下、いくつかの例を挙げる。

- (1) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな。
- (2) 最近何かあるの？ わいわいしてるみたいだけど。
- (3) すみません。夜うるさくて、眠れないのですが…
- (4) 何時だと思ってるんですか、 いい加減にしてください。

これらの発話は、いずれも筆者が自由記述型談話完成テスト (Discourse Completion Test: 以後 DCT と呼ぶ) により収集した日本語母語話者の実例 (下線は筆者によるもの) である¹。「静かにしてほしい」という発話意図を聴者に伝えるために、(1)は改善行為を行うよう直接要求、(2)は好ましくない状況を引き起こした聴者の行為を指摘、(3)は聴者の行為によって引き起こした不利益を述べ、(4)は相手を非難し、自身の不満感情を表出している。

課題Ⅰ：こうした「言語行動の仕方」の異なりを生じさせるものは、何に起因するのであろう。

- (5) ごめん、ちょっともうこんな時間だし、おしゃべりなら小さい声でしてくれないかな～ごめんね。
- (6) 嘿，哥们²，说话的时候能不能小点声，咱这楼隔音效果不太好，晚上我都睡不着觉。谢谢了哈！
訳文³：あのさ、お前、しゃべるとき声を小さくできない？この建物は防音効果がよくないから、夜、ほく良く眠れないんだ。ありがとう。

また、(5)と(6)に示したように、改善要求発話の表現形式に関して、日中間で大きな異なりが見られる。用件内容を述べる前の切り出し部において、日本語の例では、恐縮の意を示しながら注目喚起を行う「ごめん」を使用しているのに対して、中国語の例では、“嘿，哥们 (あのさ、お前)”といった親近感を示す呼称名詞を使用している。そして、用件内容を述べる(つまり、改善要求を表出する)際に、日本語の例では、「～してくれないかな～」という恩恵授受を表す授受補助動詞を用いた文型が使われているが、中国語の例では、“能不能(～できませんか)”といった能願動詞(可能性、願望を表す助動詞)を用いた可能性を尋ねる文型が用いられている。また、用件内容を述べた後の終了部において、日本語の例では、「ご迷惑をおかけしてすまない」という気持ちを表す「ごめんね」に対して、中国語の例では、「協力していただければ、ありがたい」という気持ちを表す“谢谢了哈(ありがとうね)”を使用している。

課題Ⅱ：日中間でなぜこのような対立(あるいは、相違)が存在するのだろうか。これらの対立の背後にはどのようなメカニズムが働いているのだろうか。

課題ⅠとⅡを究明するために、本稿では、「言語のあり方はそれを用いる人間の認知の営みの傾向との関連で動機付けられている」(辻編 2003:Ⅷ)という認知言語学の主張に沿い、伝統的な語用論研究の諸理論⁴を踏まえつつ、「因果連鎖」と「事態把握」という二つの認知的アプローチから改善要求発話の構成要素を考察し、改善要求発話に見られる日中の類型論的特性を明らかにするとともに、日中間の配慮の仕方の相違と認知レベルでの営みとの関連性を検討することを目的とする。

1. データ収集

本稿では、被調査者を20代の大学生と大学院生に限定し、これまでの先行研究(初鹿野ほか 1996、平井 1998、朴 2000など)でも取り上げられてきた、日常生活で遭遇する可能性が高いと思われる二つの場面を設定し、現状に不満や不快感を感じ、当事者の聴者に好ましくない状況の改善を望む場合に、どのように伝えるかについて DCT 調査を行った。

¹ 以下、特に断りのない場合、例文は筆者が DCT 調査により収集したもので、下線は筆者によるものである。

² “哥们 (gemen)”は「友人同士の親しみを込めた呼び方」(『クラウン中日辞典』三省堂出版, 2001)である。“哥”というのは本来「兄」という意味で、ここでは「虚構的用法」である。つまり、本来他人である人物を虚構的に親族とみなす点で、その分だけ相手との距離を縮める効果を生む。

³ 原文の意味と構造を忠実に生かすため、日本語訳に多少不自然さを感じることもある。以下同様。

⁴ 20世紀60年代に始まった語用論研究のことである。言語表現のみならず、それを用いる使用者や文脈との関係など発話状況まで考慮に入れた意味や会話の規則性についての研究が行われてきた。その内、画期的な成果を遂げた研究として、Austin の発話行為論、Searle の発話行為論、Grice の協調の原理、Sperber and Wilson の関連性理論、Leech のボライトネスの原理、Brown and Levinson のボライトネス理論などが挙げられる。

DCT 調査は、場面を提示した言語行動意識調査であり、相手とのやり取りの中で言語行動を遂行する自然談話の資料と異なり、発言内容をひとまとまりの発話に継続的に盛り込んでいる。もちろん実際の自然談話では、相手の反応や場面などに応じて、話し手は必ずしもこのように話すわけではないが、こうした言語行動は、熊谷 (2000:97) が指摘しているように、「話し手の頭の中にあるモデルとして、実際の相互作用の場で相手の反応に応じて変更や修正を加えられる前の、基本的にこういう出方をしたい、こう展開してしかるべき、と話し手が考えているような行動のイメージ」である。そのため、自然談話やロールプレー調査に比べ、DCT 調査のほうが、談話の流れを支える鍵概念だと考えられる話し手の心的態度 (状況や相手をどのように捉え、自分を相手にどのように認知させたいのか、そのためにどんなストラテジーを選択すればいいのかなど) の在り方をより明確に示しているのではないかと考えられる。

この意味では、自然談話やロールプレー、インタビュー、シナリオ、DCT 等々の調査方法の内、改善要求発話の表現形式がどのように人間のものの見方を反映しているかを明らかにすることを目的としている本稿には、最も相応しいのが DCT 調査だと考えたい。

表 1 DCT 調査の内訳

場面	状況	相手要因	親疎関係	年齢	上下関係	性別
1	隣に住んでいる人がよく夜遅くまで大声でおしゃべりをしている。このような状況はもう一週間ぐらい続いている。	同じ大学に通っている親しくない同級生	疎	同	同	同
2	同上	親しい友達	親	同	同	同

調査は2012年の9月から12月にかけて、日本の茨城県にあるA大学と中国の河北省にあるB大学で行った。調査協力者は日本語母語話者(以下 JNS)20名(女性13名、男性7名)と中国語母語話者(以下 CNS)20名(女性10名、男性10名)である。JNS は日本語で書かれた DCT 用紙に日本語で回答してもらった。CNS は日本語学習歴が全くない人に限定し、中国語で書かれた DCT 用紙(日本語版と同じ内容)に中国語で回答してもらった。

ある特定の場面に不満や不快感を感じた場合、直接言語によって「改善してほしい」という意図を表明する場合もあれば、表情や目線、咳払い、ため息、ジェスチャーなどの非言語サインによって相手に伝える場合もあるだろう。また、表明しない、あるいは第三者を通して相手に伝える場合もある。本稿は「改善要求行為」の言語表現を考察するため、収集したデータから言葉で相手に伝える場合だけのデータを抽出し、研究対象とする。有効データ数は次の表2に示す。

表 2 有効データ情報(実数/割合⁵)

被調査者	場面 1		場面 2	
	実数	割合	実数	割合
JNS	12 人	60%	14 人	70%
CNS	19 人	95%	16 人	80%

2. 本稿の課題

(1) 課題 I — 「因果連鎖 (causal chain)」の分析に基づき、日中間の類型論的特性を考察

「われわれが認知するのは、単なるモノの世界だけではなく、物体が移動したり状態が変化したりするような、コトの世界も対象となる。こうした認知の世界での出来事を事象構造(event structure)という。それは特に文の形で世界の一面を捉えるプロセスに深く関わっている」(大堀 2002:97)。事象を構成する重要な要素の一つは参加者の間の相互作用のことである。それは参加者がどんな影響を及ぼしあい、どんな変化をするのかということと関わる。

⁵ ここでの「割合」とは、非言語ではなく、言語化して伝える人の実数を被調査者の総数(20人)で割ったものを%で示したものである。

現実世界では、一つの出来事にいくつかの原因があり、因果関係が多方面に及んでいるという事実がある。何らかの問題が現実世界で起きたとき、その原因はいったい何なのかを突き止めることが難しいのは、しばしば経験することである。しかしながら、人の認知プロセスでは、無数に張りめぐられた因果関係の網の中から一筋の連鎖を取り出し、図1のように線状的な関係へと還元することで出来事が理解されている。言い換えれば、「われわれが経験する出来事は、ある一つの対象から発した「エネルギー」が別の対象に伝わり、それが順々に伝達されることで一連の出来事が生じるというモデルによる捉え方がされると考えられる」(大堀 2002:99)。これは日常的な事態の捉え方についての理想認知モデル(ICM)とも言われ、こうした一連の因果関係の繋がりを「因果連鎖」(causal chain)とされている⁶。



図1 線状化された因果関係(大堀 2002:99より)

連鎖上の●で表した節点は事象の参加者を、節点をつなぐリンクは参加者間の影響関係を表している。このモデルは因果連鎖の上で玉突き式に出来事が起きるという意味で、ビリヤードボール・モデル(billiard-ball model)⁷とも言われている。

以上、概観してきたように、大堀(2002)は、事態というものは因果連鎖とみなされ、この因果連鎖の中から認知主体がある細密度のもとに、連鎖の一部をプロファイルすることによって出来事を描き、述語を中心とした文レベルでの言語表現と認知プロセスとの関わりが議論の中心的な対象となっている。こうした一連の認知プロセスは、実は文レベルだけではなく、いくつかの文をひとまとまりとして考える談話レベルでの言語化にも見られる。

例を挙げれば、本稿で設定した場面での言語行動の究極的な目的は、うるさい現状を改善してもらうことであろう。その目的が達成されるまでには、図2に示したような因果関係を表す状況の段階が存在すると考えられる。

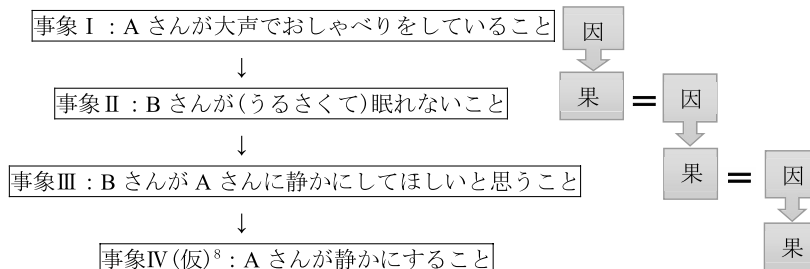


図2 改善要求行為における因果連鎖の分析例

この図を文で説明すれば、「Aさんが大声でおしゃべりをしている。そのせいで、隣に住んでいるBさんがうるさくて眠れない。BさんがAさんの行為(騒音)によって不利益(よく眠れない)を受けたため、Aさんに静かにしてほしいという改善の願望要求を出した。Bさんの願望要求に応じて、Aさんが静かにした」、といったような事象の連鎖が考えられる。例えば、次の日本語母語話者の発話例を参照されたい。

⁶ 大堀(2002)を参考にした。

⁷ We tend to conceive of our world as being populated by discrete objects, each of which (at a given moment) occupies a distinct location. Some of these objects are capable of moving about and interacting with others, particularly through direct physical contact. Motion is driven by energy, which some objects are capable of supplying internally and others must receive from outside sources. When physical contact is initiated with any degree of force, energy is transmitted from the mover to the impacted object; this may cause the latter to move also, and possibly to interact with additional objects. Let us call this archetypal conception the “billiard-ball model”. (Langacker1990:209)

⁸ AさんがBさんの願望要求に応じないときもある。ここでは、仮に改善要求発話の目的が達成された状況を設定した。

(7) 実はそちらの話声が壁伝いで聞こえていまして、 そのせいで最近夜眠れないのです。

事象Ⅰ

事象Ⅱ

申し訳ないのですが、夜遅くまで話すのは控えてもらってもいいですか。

事象Ⅲ

改善要求発話の究極的な目的は好ましくない状況を改善してもらうことで、この目的を達成するために、(7)では、話者が好ましくない現状を引き起こした聴者の行為に言及すること(事象Ⅰ)から発話を始め、聴者の行為が自分に不利益をもたらし、今困っていること(事象Ⅱ)を聴者に話した後、好ましくない現状を改善してほしいという願望(事象Ⅲ)を聴者に伝えている。この発話では「Aさん」から「Bさん」までの影響関係だけが切片化されている。これらは事象の中心的な参加者であり、他の周辺の参加者(例えば、「壁が薄くて防音効果が悪い」や、「翌日に早起きする」など)は因果連鎖の表記から捨象されている。

大堀(2002)に倣い、改善要求行為における事象の因果連鎖を一般化すると、図3に示したような事象の連鎖が考えられる。

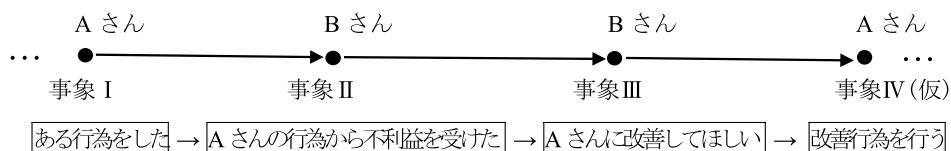


図3 改善要求行為における事象の因果連鎖

この図を文で説明すれば、「Aさんがある行為をした、あるいは今現在している。その行為が引き起こした状況がBさんにとっては好ましくないため、Aさんの行為がBさんに不利益をもたらした。BさんがAさんの行為から不利益を受けたため、Aさんに好ましくない状況を引き起こした行為を改善してほしいという願望要求を出した。Bさんの願望要求に応じて、Aさんが好ましくない状況を引き起こした行為を改善する」となる。

このように、改善要求行為には、事象Ⅰ：Aさんがある行為をした。 → 事象Ⅱ：Aさんの行為でBさんが不利益を受けた。 → 事象Ⅲ：BさんがAさんに好ましくない状況を引き起こした行為を改善してほしい。 → 事象Ⅳ：Aさんが改善行為を行うといった一連の事象の因果連鎖が考えられるため、理論的には事象Ⅰ、事象Ⅱ、事象Ⅲのいずれかに言及すれば、因果連鎖の作用を通して、事象Ⅳに影響を及ぼし、改善要求発話の目的が達成できる。この因果連鎖が存在するからこそ、改善要求行為を行う際に、様々な発話の仕方、あるいは言語行動の仕方が可能となる。

文レベルでの因果連鎖論に一つ重要な概念が「連鎖の切片化」ということである。言い換えれば、「出来事を言語化する際には、一連の連鎖の中から限られた部分だけをプロファイルする」(大堀2002:99)ことである。この現象はいくつかの文をひとまとまりとして考える談話レベルでの言語化にも見られる。例えば、次の改善要求発話の例を参照されたい。

- (8) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな。 ((1)の再掲) 【事象Ⅲ】
- (9) 最近何かあるの？わいわいしてるみたいだけど。 ((2)の再掲) 【事象Ⅰ】
- (10) すみません。夜うるさくて、眠れないのですが… ((3)の再掲) 【事象Ⅱ】
- (11) 夜声すごい聞こえてくるから、音量おとしてもらっている。 【事象Ⅰ】 + 【事象Ⅲ】

下線部で示したように、(8)では事象Ⅲ、(9)では事象Ⅰ、(10)では事象Ⅱだけを取り上げており、(11)では事象ⅠとⅢを切り出し言語化している。こうした可能な因果連鎖の中から一部を切り出すことが連鎖の切片化(segmentation)とされている。

因果連鎖論のもう一つの重要な概念はどのくらい事態を細かく見るかという「細密度のとり方」である。改善要求発話をひとまとまりの談話として考えるとき、取り上げている事象の数が多ければ多

いほど、細密度が高いと考えられる。この意味では、一つの事象だけを取り上げた(8)(9)(10)に比べ、二つの事象を取り上げた(11)のほうが細密度が高いと言える。

また、一つの事象に対して細かく述べれば述べるほど、細密度が高いと考えられる。例えば、事象Ⅲを言語化する際に、(12)のように、用件だけを述べている場合もあれば、(13)のように用件だけではなく、自分がなぜ改善要求を表出したかも言語化し、述べている場合もある。用件だけを述べた(12)に比べ、理由付けまで述べた(13)のほうが細密度が高いと言える。

(12) 夜もう少し静かにしてくれないかな。

(13) さすがにもう遅い時間だから、もう少し静かにしてもらってもいいかな。

上記のように、談話レベルでの事態の言語化においても、図4に示したように、文レベルでの事態の言語化と同様に、話者(=認知主体)が「多方面に広がった因果関係の中から線状の連鎖を抽出した上で、連鎖の一部をある細密度のもとに切片化する作業」(大堀 2002:99-100)を行っていると考えられる。

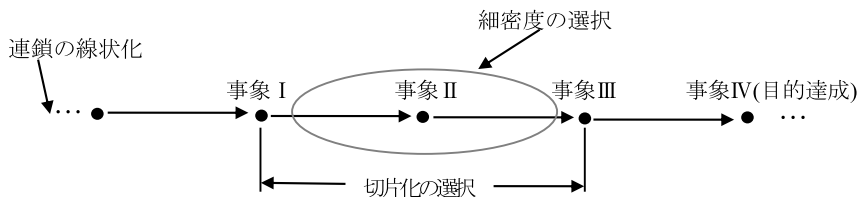


図4 改善要求行為における事象の認知プロセス(大堀 2002:100に倣い)

「因果連鎖に基づいた分析は、言語の類型論的特性を考える上で、有効な視点を提供する」と大堀(2002:109)が指摘している。日・中改善要求発話において、因果連鎖の「切片化」及び「細密度のとり方」から、どのような類型論的特性が見られるのだろうか。これは本稿の一つ目の課題である。

(2) 課題Ⅱ—「事態把握 (construal)」の観点から、日中間で配慮の仕方に相違が生じるメカニズムを検討

ここまで、主に改善要求発話の「用件内容部」(目的達成に直接関与する部分)を中心に述べてきたが、実際の発話場面においては、話者がいきなり用件内容を話すのではなく、(14)と(15)で示したように、何らかの方法で会話を切り出してから、用件内容を述べることが多い。また、改善要求行為は相手を動かして特定の行動をさせる行為であるため、相手の「権利や自由を侵害されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かす度合いが高いと言われている。そのため、用件内容を述べた後に、何らかの言葉を用いて、人間関係を良好に保つ姿勢を示すことがある。

(14) 切り出し部：ごめん、

用件内容部：ちょっともうこんな時間だし、おしゃべりなら小さい声でしてくれないかな～
終了部：ごめんね。

(15) 切り出し部：嘿，哥们，

用件内容部：说话的时候能不能小点声，咱这楼隔音效果不太好，晚上我都睡不着觉。
終了部：谢谢了哈！

人間関係を良好に維持するために、積極的に配慮する姿勢を示す点では、日本語と中国語が共通になっているが、前文でも触れたようにその具体的な配慮の仕方に関して、日中間で以下のような相違が見られる。「ごめん」⇔「嘿，哥们(あのさ、お前)」、「～してくれないかな～」⇔「能不能(～できませんか)」、「ごめんね」⇔「谢谢了哈(ありがとうね)」。

「切り出し部」と「終了部」の対立現象については、従来B&Lのポライトネス理論から説明することが多く、日本語母語話者がネガティブ・ポライトネス心理からの配慮を多用し、中国語母語話者が

ポジティブ・ポライトネス心理からの配慮を多用する(滝浦 2008など)と指摘されている。このポライトネス心理の相違が生じる原因について、従来、文化などの面からの分析が多かったが、人間のものの見方という内面的な要素からの研究が少なかった。また、「用件内容部」の「求心的な授受補助動詞」と「能願動詞」の対立現象について、B & Lのポライトネス理論からは説明がつかい兼ねることがある。

そこで、本稿は、認知レベルでの営みの相違が言語間の配慮の仕方の相違を生じさせる潜在的な根源であるという仮説を提出し、「認知とポライトネスの接点」という新たな研究方法で、改めてこれらの現象を分析することにする。

池上(2005、2006、2011a、2011b)によると、事態を言語化する際に、話者(=認知主体)は「自らが把握の対象とする客体である事態との関わり合いにおいて、二つの類型的図式で対立する」(池上 2011a:51)。

- 〈主観的把握〉(subjective construal) : 話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。
- 〈客観的把握〉(objective construal) : 話者は問題の事態の外にあって、傍聴者ないし観察者として客観的に事態把握をする。

「言語が異なると、それぞれの話者による〈事態把握〉の仕方に好みの差があるということは、言語のいろいろなレベル、さまざまな側面について認められることである」と池上(2011b:318)が指摘している。前文で触れた日中間の配慮の仕方の相違が、こうした事態把握の類型に関連しているのだろうか。もし関連しているのであれば、日中間の配慮の仕方が事態把握の類型にどのように関わっているだろうか。これは本稿の二つ目の課題である。

3. 因果連鎖の分析から見る日中間の類型論的特性

(1) 「連鎖の切片化」の分析

2節(1)で論述したように、改善要求行為には、事象Ⅰ：Aさんがある行為をした → 事象Ⅱ：Aさんの行為でBさんが不利益を受けた → 事象Ⅲ：BさんがAさんに好ましくない状況を引き起こした行為を改善してほしい → 事象Ⅳ：Aさんが改善行為を行うといったような事象の連鎖が考えられる。この一連の因果連鎖の中から、どの部分を切り出して言語化するかといった「連鎖の切片化」において、日本語と中国語の話者がそれぞれどのような好みがあるだろうか。以下、DCT調査により収集したデータを集計し、分析を進めたいと思う。記述の便宜上、事象Ⅰを【他者行為指摘】、事象Ⅱを【不利益告知】、事象Ⅲを【改善要求】とする。

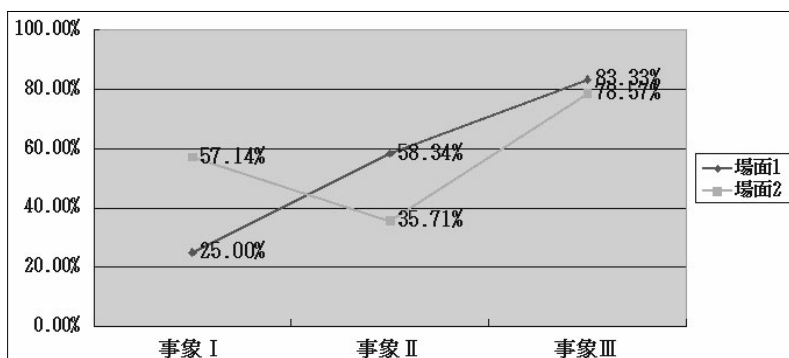


図5 日本語母語話者の親疎関係によって各事象の選択率⁹

図5は日本語母語話者が親疎関係によってどの事象を選択し言語化しているかを示したものである。各事象の選択率を比べる結果、いずれの場面で、目的達成に最も近い事象Ⅲ【改善要求】の選択率が、他の二つの事象より高いことが分かった。また、事象Ⅰ【他者行為指摘】と事象Ⅱ【不利益告知】の選択率に関して、親しくない同級生に対して、事象Ⅱ【不利益告知】を選択する傾向が強いが、親し

⁹ ここでの「選択率」とは、各事象の出現頻度を事例総数(12例)で割ったものを%で示したものである。以下同様。

い友達に対して、事象Ⅰ【他者行為指摘】を選択する傾向が強い、といった親疎関係によって、事象Ⅰと事象Ⅱの選択率が反転する傾向が見られた。その原因については、事象Ⅰ【他者行為指摘】が相手が動作主である不利益付与行為を直接指摘しているため、自分のことを述べている事象Ⅱ【不利益告知】に比べると、相手のフェイスを脅かす可能性が高いと考えられ、親しくない人に改善要求を表出する際に、フェイス脅威性の高い事象Ⅰに言及することを控えめにしているからだと考えられる。

また、日本語母語話者の各場面で使用している発話パターンを集計した結果、親しくない隣人に対する場面においては、(16)と(17)で示した例のように、事象Ⅲだけを切り出して言語化するパターンが全体の41.67%、事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲを切り出して言語化するパターンが25%という結果を得た。

- (16) すみません、ちょっと静かにしてもらってもいいですか。 【事象Ⅲ】
 (17) すみません、申し訳ないんですけど、声が結構響いて眠れないので…もう少しおさえめでお願いしてもいいですかね。 【事象Ⅰ】+【事象Ⅱ】+【事象Ⅲ】

一方、親しい友達に対する場面においては、はっきりした傾向が見られず、目的達成に最も近い事象Ⅲだけを切り出して言語化した事例が、事象Ⅰ+事象Ⅲ、事象Ⅱ+事象Ⅲ、事象Ⅰだけを切り出して言語化した事例と同じ割合であり、それぞれ21.43%を占めていることが明らかになった。

- (18) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな？((1)の再掲) 【事象Ⅲ】
 (19) 夜声すごい聞こえてくるから、声量おとしてもらっていい。 【事象Ⅰ】+【事象Ⅲ】
 (20) もうちょっと静かにしてよー寝れないってー！¹⁰ 【事象Ⅲ】+【事象Ⅱ】
 (21) 最近何かあるの？わいわいしてるみたいだけど。((3)の再掲) 【事象Ⅰ】

以上考察してきたように、日本語母語話者の改善要求発話の事象の「切片化の選択」においては、親しくない隣人に対する場面に比べ、親しい友達に対する場面で、より豊富な切片化のパターン(あるいは、発話パターン)を使用していることが明らかになった。

切片化のパターンに豊富なバラエティが見られるということが、日本語母語話者が改善要求行為を行う際に、親しくない人に対する場面に比べ、親しい友達に対する場面での心理的負担(相手との人間関係を崩さないように配慮する負担)が低く、自分の言いたいものをより気軽に言える、あるいはより自由に自分の意見を述べられることを示唆しているのではないかと考えられる。

以上は、日本語母語話者の各場面における「連鎖の切片化」の特徴に関する考察である。次は、中国語母語話者の「連鎖の切片化」について考察する。

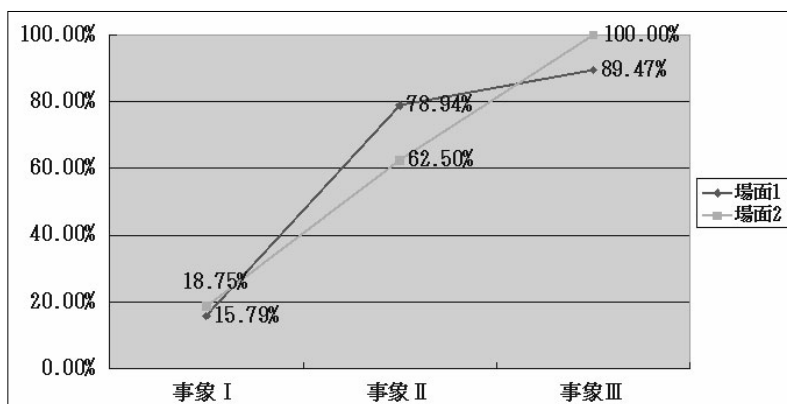


図6 中国語母語話者の親疎関係によって各事象の選択率

図6に示したように、日本語母語話者と同様に、いずれの場面において、中国語母語話者が事象Ⅲ

¹⁰ 本稿は、改善要求行為と考えられる一連の事象の連鎖の内、どの部分が切り出されて言語化しているかを考察するのが主な目的であるため、事象の出現順序には拘っていない。

【改善要求】を選択し言語化していることが多い。選択率から、場面1(相手は親しくない同級生)では約9割、場面2(相手は親しい友達)では全ての被調査者が事象Ⅲ【改善要求】を取り出し、言語化していることが分かる。また、親疎関係に関わらず、事象Ⅱ【不利益告知】の選択率が事象Ⅰ【他者行為指摘】より遥かに高いことが見られる。

中国語母語話者の各場面で使用している発話パターンを集計した結果、親しくない隣人に対する場面で、(22)と(23)で示した例のように、事象Ⅱ+事象Ⅲを切り出して言語化するパターンが全体の57.89%、事象Ⅲだけを切り出して言語化するパターンが21.05%という結果を得た。

- (22) 同学¹¹，我是一个声音很敏感的人，听见声音总会睡不着觉，请你可不可以别通电话到那么晚。
訳文：すみません、私は音にとっても敏感なので、音が聞こえると眠れないんです。こんな遅い時間に電話をしないでもらえませんか。 【事象Ⅱ】+【事象Ⅲ】
- (23) 跟你商量个事，晚上能不能早点打电话或者声音小一点儿。
訳文：ちょっと話したいことがあるんですが、夜、電話をもう少し早めにするか、話す声を控えめにするかしてもらえませんか。 【事象Ⅲ】

親しい友達に対する場面では、(24)と(25)で示した例のように、事象Ⅱ+事象Ⅲを切り出して言語化するパターンが全体の50%、事象Ⅲだけを切り出して言語化するパターンが31.25%という結果を得た。

- (24) 亲¹²，晚上能不能别聊了，我都一周没睡好了，就算我求你了。
訳文：あのさ、夜のおしゃべりやめてくれないかな。僕、もう一週間もぐっすり眠れてないんだよ。勘弁してよ。 【事象Ⅲ】+【事象Ⅱ】
- (25) 朋友，晚上能早点休息吗？聊太迟对自己身体不好。
訳文：あのさ、夜早く寝てくれない？遅くまでおしゃべりすると体によくないよ。 【事象Ⅲ】

因果連鎖の切片化の分析結果に基づき、改善要求発話に見られる日中両言語の類型論的特性を以下のようにまとめる。

日中共通の特性：理論的には一連の事象の因果連鎖の内、事象Ⅰ、事象Ⅱ、事象Ⅲのいずれかに言及すれば、事象Ⅳに波紋を広げて、発話の目的が達成できるが、実際の運用では、両言語とも目的達成に最も近い位置にある(関連性付けの処理労力が最も小さい)事象Ⅲを言語化していることが多い。

日中間で異なる特性：日本語では、「疎」の人に対しては定型化した発話パターンを使用する傾向が強いが、「親」の人に対しては、豊富なバラエティが見られる。一方、中国語では、「親」と「疎」の区別意識がほぼ見られず、事象Ⅱ+事象Ⅲを切り出して言語化するパターンと事象Ⅲだけを切り出して言語化するパターンが定型化したパターンとして使用されている。

(2) 「細密度」の分析から

前節の考察から、話者が一つの発話に一つの事象だけを切り出して言語化している場合もあれば、いくつかの事象について言及している場合もあることが分かった。一連の因果連鎖の中で、取り上げられる事象の数が多ければ多いほど改善要求発話が長くなる。つまり、談話レベルから見ると、取り上げる事象の数が増えれば増えるほど、事態をどのぐらい細かく見るかという細密度が高くなると考えられる。自由記述で言及された事象を一つ1点とし(例えば、「眠れなくて困ってるんで、もう少しトーンを落として話してもらえると助かります。」と言った場合、事象Ⅱ【不利益告知】と事象Ⅲ【改

¹¹ “同学(tongxue)”は、「学生に対する呼称。“李同学(李さん)”“鈴木同学(鈴木さん)”のように、人名の後ろにつけることもできる」(『クラウン中日辞典』三省堂出版, 2001)。特に、親しくない学生同士、あるいは名前の知らない学生に対して、多用される。

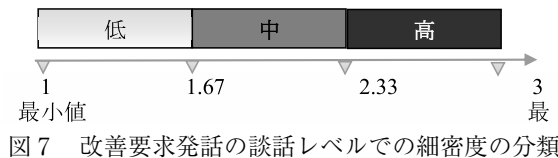
¹² “亲(qin)”は流行語で、親しみを込めた呼び方である。

善要求】に言及していることになるので、2点となる。なお、得点の最大値は1人の記述につき3点で、最小値は1人の記述につき1点とする。)、各場面における改善要求発話の平均得点を求めた。

表3 各場面における改善要求発話の平均得点(標準偏差)

	日本語		中国語	
	場面1(疎)	場面2(親)	場面1(疎)	場面2(親)
平均得点(標準偏差)	1.67(0.79)	1.71(0.53)	1.84(0.36)	1.81(0.43)

表3に示したように、日本語より中国語の改善要求発話の平均得点がやや高いことが見られる。ただし、たとえ図7のように、得点によって改善要求発話の細密度を「低」、「中」、「高」の三段に均等に分けるとしたら、日中両言語とも、いずれの場面において、改善要求発話の細密度が「中」のレベル(平均得点が1.67~2.33の間にある。)になっていることが分かった。



ここまででは主に談話レベルでの細密度をめぐって考察してきたが、細密度の分析において、もう一つ重要な要素は、事象内でどのぐらい細かく見るかということである。

- (26) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな。 ((1)の再掲)
 (27) ごめん、ちょっともうこんな時間だし、おしゃべりなら小さい声でしてくれないかな〜、ごめんね。 ((5)の再掲)

(26)と(27)はいずれも事象Ⅲ【改善要求】を言語化した例である。(26)では、「ちょっと悪いんだけど」という注目喚起を表す表現を用いて発話を切り出した後、「改善してほしい」という要件を単刀直入に話している。一方、(27)では、発話を切り出した後、「改善してほしい」という要件を述べる前に、「ちょっともうこんな時間だし」という表現を用いて、「遅い時間に大きい声で話すと、近所の人に迷惑を掛けるから」といったような、自分の意見(つまり、改善してほしいこと)を正当化する根拠、あるいは、自分がなぜ改善要求を表出するかといった理由となる事情を説明している。

DCT 調査により収集した事例を考察した結果、日本語では要件だけを述べる事例が多く見られるが、理由付けまで細かく述べるのが、26例の内わずか3例(割合が11.54%)しかなかった。一方、中国語では、事象Ⅱ【不利益告知】と事象Ⅲ【改善要求】を言語化する際に、理由付けまで細かく述べる事例が多く見られた。収集した35例の実例のうち、19例が理由説明まで細かく述べている。割合が54.29%に達している。以下、その代表例をいくつか挙げる。

- (28) 同学，太晚睡觉对皮肤不好哦，下回别聊天太晚了，早些睡吧！
 訳文：あのさ、寝るのが遅いとお肌に良くないよ。これからは遅くまでおしゃべりしないで、早く寝たら。
 (29) 嘿，哥们，说话的时候能不能小点声，咱这楼隔音效果不太好，晚上我都睡不着觉。谢谢了！ 哈！ ((5)の再掲)
 訳文：あのさ、お前、しゃべるとき声を小さくできない。この建物は防音効果がよくないから、夜、ぼく良く眠れないんだ。ありがとう。
 (30) 时间不早了赶紧睡吧，明天还要学习呢！要不就没有精力了。
 訳文：もう遅い時間だから早く寝たら。明日また勉強があるんだし、早く寝ないと元気が出ないよ。
 (31) 我对声音太敏感，这一周没怎么睡好，请同情同情我，小点声音吧。
 訳文：私、音にすごく敏感だから、この一週間よく眠れなかったの。私に同情して、小さい

声にしてよ。

(28)と(29)は場面1(相手は親しくない同級生)で収集した事例である。下線部で示したように、(28)では、事象Ⅲ【改善要求】を言語化する際に、“太晚睡觉对皮肤不好哦(寝るのが遅いとお肌によくないよ)”といった、自分の意見(遅くまでおしゃべりしないで、早く寝たら)を正当化する根拠を取り上げている。(29)では、事象Ⅱ【不利益告知】を言語化する際に、“咱这楼隔音效果不太好(この建物は防音効果がよくないから)”といった、自分が不利益を受けた理由となる事情を説明している。

(30)と(31)は場面2(相手は親しい友達)で収集した事例である。(28)(29)と同様に、(30)では、事象Ⅲ【改善要求】を言語化する際に、“明天还要学习呢!要不就没有精力了。(明日また勉強があるんだし、早く寝ないと元気ができないよ)”という客観的な理由を述べ、前文の“赶紧睡吧(早く寝たら)”といった自分の意見を正当化する根拠(つまり、個人の意志・願望で改善要求を表出したわけではなく、客観的な事情があり、その事情により聴者が改善行為を行う必要がある)を取り上げている。(31)では、事象Ⅱ【不利益告知】を言語化する際に、“我对声音太敏感(私音にすごく敏感だから)”といった、自分が不利益を受けた理由となる事情を説明している。つまり、眠れないことの原因を自分が音に敏感であることに帰因している。

これらの理由提示表現は、一見話者が自己主張を強く聴者にアピールしているように見えるが、実際は客観的な理由を述べることによって、個人対個人の対立を回避し、人間関係を良好に維持しようとした配慮の一種である。当該部分がなかった場合、却って強い印象を相手に与えてしまう恐れがある。

例えば、(29)では、“咱这楼隔音效果不太好,晚上我都睡不着觉”(この建物は防音効果がよくないから、夜、ぼく良く眠れないんだ。)に示したように、話者が自分の眠れない原因を建物のせいにしてしている。つまり「建物の防音効果がよければ、大きい声で話しても、近所に人には迷惑を掛けないかもしれない」といった暗示的な意味が読み取れるため、「建物の防音効果がよくない」という理由を提示することが、好ましくない状況を引き起こした相手の行為への指摘を弱める効果がある。

その効果をより明確に見せるために、ここでは、理由提示の部分を除いた例を挙げる。

(29') 嘿, 哥们, 说话的时候能不能小点声, 晚上我都睡不着觉。谢谢了哈!(作例)

訳文: あのさ、お前、しゃべるとき声を小さくできない。夜、ぼく良く眠れないんだ。ありがとう。

(29')では、“说话的时候能不能小点声, 晚上我都睡不着觉”(しゃべるとき声を小さくできない。夜、ぼく良く眠れないんだ)に示したように、話者が自分の眠れない原因を聴者の話し声大きいことに帰因しているように聞こえるため、聴者のフェイスを脅かす度合いが高く、人間関係を良好に保てない恐れがある。

最後に、「細密度」の分析結果に基づき、改善要求発話に見られる日中両言語の類型論的特性をまとめる。

共通点: 因果連鎖から取り上げられる事象の数といった談話レベルでの細密度は、中国語が日本語よりやや高いが、両言語とも「中」のレベルである。

相違点: 各事象を言語化する際に、日本語では用件のみを述べる傾向が強いが、中国語では用件だけではなく、配慮の仕方的一种として、自分の意見を正当化する根拠(個人の意志・願望で改善要求を表出することを避け、客観的な事情があり、その事情により聴者に改善行為をしてもらう必要があること)を取り上げたり、自分が不利益を受けた原因を客観的な事情や個人の事情に帰因したりする、といった理由付けまで細かく述べる傾向が見られた。

4. 「事態把握」から見る日中間で配慮の仕方に相違が生じるメカニズム

2節(2)で論述したように、改善要求行為は相手を動かして特定の行動をさせる行為であるため、相手の「権利や自由を侵害されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かす度合いが高い。そのフェイス脅威度を弱めるために、話者が発話する際に、何らかの方法で積極的に配慮する姿勢を示すことが多い。日中間でそれぞれどのような仕方で配慮する姿勢を示しているのだろうか、以下、改善要

求発話を「切り出し部」「用件内容部」「終了部」の3つの部分に分け、この課題を検討する。

(1)「用件内容部」

前文ですでに論述したように、改善要求行為には、事象Ⅰ：Aさんがある行為をした → 事象Ⅱ：Aさんの行為でBさんが不利益を受けた → 事象Ⅲ：BさんがAさんに好ましくない状況を引き起こした行為を改善してほしい → 事象Ⅳ：Aさんが改善行為を行うといった一連の事象連鎖が考えられる。事象Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのいずれかに言及すれば、改善要求発話の目的が達成できるのである。本稿では、事象Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを言語化する部分を改善要求発話の「用件内容部」とする。

3節の「連鎖の切片化」の選択率から、「用件内容部」において、日中両言語とも目的達成(事象Ⅳ)に最も近い位置にある事象Ⅲ【改善要求】を取り出し言語化することが多いことが分かった。事象Ⅲを言語化する際に、日中両言語がそれぞれどのような表現形式を用いているだろうか。以下、DCT調査により収集したデータを集計し、分析を進めたいと思う。

表4 日本語母語話者の改善要求表現の文型と個数

場面1(疎)		場面2(親)	
文型	数	文型	数
～てもらってもいいですか。	2	～てくれない。	3
～てもらえませんか。	1	～てくれないかな。	2
～てもらえますか。	1	～てもらっていい。	2
～いただけませんか。	1	～てもらってもいいかな。	1
～てもらいたいんですが…	1	～てね。	1
～てもらえると助かります。	1	～てよー	1
～てもらえると助かるんですが、いいですか。	1	～て。	1
～てお願いしてもいいですかね。	1	合計	11
～てください。	1		
合計	10		

表4に示したように、日本語母語話者は、場面1(相手は親しくない同級生)において、授受補助動詞「～てもらう」の活用形「～てもらえる」「～てもらってもいい」「～てもらいたい」などを用いた文型を多用している。一方、場面2(相手は親しい友達)においては、「～てもらう」より「～てくれる」の活用形を用いた文型が多用されていることが見られる。また、授受補助動詞を用いた文型以外に、直接的に指示を出す「～てね」「～てよー」「～て」などの文型も使用されている。

表5 中国語母語話者の改善要求表現の文型と個数

場面1(疎)		場面2(親)	
文型	数	文型	数
能不能～	3	你可以～吗?	1
你/咱能～吗?	3	你能不能～	1
能否～请你体谅一下、尽量不要～	1	能不能别～了	1
可以～吗?	1	能～吗?	1
你可不可以～、希望你们不要～	1	咱能～不?	1
能不能麻烦你们～	1	～吧	2
请你可不可以别～	1	别～(了)	2
别～了、～吧!	2	请你～	1
请你别～好吗?	1	拜托你们～吧	1
请你们～好吗?	1	请～吧	1
别～了	1	～好不好?	1
不要～了	1	不要～、好不? 拜托啦!	1
合計	17	早点睡觉	1
		打电话可以早一点	1
		合計	16

表5は中国語母語話者が場面1と場面2で用いた改善要求表現の文型である。太字体で示したように、親しくない同級生(場面1)に対して、能願動詞¹³を用いた“能不能～(～できませんか)”“可不可以～(～できませんか)”“能否～(～できませんか)”“能～吗(～できますか)”“可以～吗(～できますか)”などの文型が11例で、全体の64.71%を占めている。一方、親しい友達(場面2)に対しては、能願動詞を用いた文型以外に、“请～吧(～てくださいね)”“～吧(～てね)”“～好不好(～いいですか)”“不要～(～しないでください)”“別～(～やめてください)”などのような、直接的に指示を表出する文型が多く使用されている。

以上の考察結果から分かるように、親しい人より親しくない関係の人に対して、より間接的に改善要求を表出する点では、日中両言語が共通しているが、具体的な表現形式の面では、日中間で大きな異なりが見られ、日本語では授受補助動詞を用いた文型を多用しているのに対して、中国語では能願動詞を用いた文型を多用することになっている。

日中間のこの相違の背後にどのようなメカニズムが働いているだろうか。以下、意味構成の面からこれらの文型を考察し、分析を進めたいと思う。

「～てくれる」と「～てもらう」は、いずれも求心的¹⁴な授受補助動詞で、受益標識として使われており、話者が恩恵・利益の受け手として「聴者が静かにする」という事態に関与することを示唆している。「～てくれる」と「～てもらう」を用いることにより、話者が聴者の改善行為が自分にとってはありがたいであることを聴者に伝え、肯定的評価や謝意を表すことよって、聴者の積極的フェイス(「他者によく思われたい、好かれたい」)を尊重する姿勢を示している。また、「くれる」と「もらう」はいずれも「動作主の授益」ではなく、「話者の受益」に焦点を当てた授与動詞であるため、「～てくれる?」と「～てもらえる?」などの構文では、聴者が動作主である改善行為ではなく、話者自身の話題(恩恵の有無)に焦点が当てられている。特に、授受補助動詞「～てもらう」を用いた構文は、一人称の話者が主格名詞の位置に置かれており、あたかも話者自身の話題(恩恵・利益を受けることが可能かどうか)について聴者に意見を求めているように聞こえるため、改善要求行為の押しつけがましさが緩和されている。

一方、中国語では、能願動詞(願望、可能性を表す助動詞)“能”“可以”が動作主の意志を捨象することができるため、“能不能～(～できませんか)”“你能～吗?(あなたが～できますか。)”などの構文は、改善行為を行う意志の有無を聞くのではなく、聴者がその行為を実現することが可能かどうかを聞いている。「ある動作・状態の実現の可能性が能力ととりまく条件との相互作用のうえになりつつ」(奥田 1986:190)ため、“能不能～”“你能～吗?”などの構文は、聴者が改善行為を実行する主体的な条件(意志と能力)が揃っているかどうかを尋ねると同時に、意志と関わらない客観的な条件により可能かどうか(つまり「条件可能」という意味も含意されている。この「客観的な条件により可能かどうか」という含意が、聴者に理由説明、弁解する余地を与え、改善要求行為がもたらす聴者の積極的フェイスへの侵害(快諾することへの心理的負担¹⁵)を弱めることができる。

このように、聴者に直接的に改善の指示を出すのを避けるために、日本語では、求心的な授受補助動詞を用い、話者が恩恵・利益の受け手として聴者が動作主である改善行為に入り込んで、話者自身の話題(恩恵の有無)に焦点を当て、改善行為を行うよう働きかけている。一方、中国語では、動作主の意志を捨象できる能願動詞を用いることによって、聴者が改善行為を行う意志があるか否かを直接に聞くのを避け、改善行為を実現する可能かどうかを聞く形で、聴者に客観的な条件により実現不可能という弁解、断りの余地を与えつつ、改善行為を行うよう働きかけている。

(2)「切り出し部」

本稿では、改善要求発話の「用件内容部」に先立つ部分を「切り出し部」とし、用件内容を述べた後の部分を「終了部」とする。4節(1)で述べてきたように、「用件内容部」が対人配慮の機能を担いつつ、主に当該言語行動の目的(改善要求)を効果的に達成する機能を果たす。その前後に付けてい

¹³「能願動詞」は「認定助動詞」とも言う。「主に動詞の前に立って、願望、意欲、当為、許可、可能性など認定を表すことばをさします」(藤堂・相原 1985:119)。

¹⁴「求心的」というのは、「話手の立っている地点(ココ)へ向かって、または話手の指定する地点(ココ)へ向かっての移動である。それ以外の方向が非求心的である」(三上 1970:150)。

¹⁵「依頼がなされた場合、依頼を受けた側はそれを引き受けないと依頼者をがっかりさせ、嫌われてしまうのではないかと感じる」(山岡・牧原・小野 2010:145)ため、改善要求行為は相手の「他者によく思われたい、好かれたい」という積極的フェイスを脅かす。

る「切り出し部」と「終了部」は目的達成に直接に関わっていないが、相手との対人関係を良好に保つ上では重要な役割を果たしている。

改善要求発話の「切り出し部」と「終了部」において、日中両言語がそれぞれどのような表現が用いられているだろうか、以下、DCT 調査により収集したデータを集計し、分析を進めたいと思う。

表6 日本語母語話者の「切り出し部」に用いる表現の形式と個数

場面1(疎)		場面2(親)	
表現形式	数	表現形式	数
すみません、	4	悪いけど、/ちょっと悪いんだけど、	2
すみません、申し訳ないんですけど、	1	あの、/あのさー、	2
いきなりすみません。最近越してきたものですが、	1	ごめん、	1
合計	6	合計	5

表7 中国語母語話者の「切り出し部」に用いる表現の形式と個数

場面1(疎)		場面2(親)	
表現形式	数	表現形式	数
同学、	2	○○○ ¹⁶	2
哥们/嘿，哥们，	2	亲	2
你好，	2	朋友	1
喂，○○○	1	哥	1
○○○同学你好，	1	哥们	1
不好意思，	2	骚年	1
实在不好意思，哥们！	1	嗨	1
麻烦你一下，	1	合計	9
跟你商量个事，	1		
合計	13		

表6に示したように、日本語母語話者が場面1(親しくない隣人に対する場面)と場面2(親しい友達に対する場面)で使用している表現はいずれも恐縮の意を表明しながら注目喚起をする表現である。データは多くないが、日本語母語話者が親しくない人より親しい関係の人に対して、より親近感を感じさせる表現形式を「切り出し部」に用いる傾向が明確に見られた。

一方、中国語では、親しくない人より親しい関係の人に対してより親近感を感じさせる表現形式を用いる点で日本語に共通しているが、その方法としては、“哥们(gemen 友人同士の親しみを込めた呼び方)”“亲(qin 流行語、親しみを込めた呼び方)”、“骚年(saonian 流行語、学生同士のからかいを込めた呼び方)”“○○○(相手の名前やニックネーム)”などの親近感を示す呼称名詞である。

親しくない人に対して、“不好意思(buhaoyisi すみません)”のような恐縮の意を表明しながら注目喚起をする表現を用いることがあるが、多用しているのは、“同学(tongxue 親しくない学生同士の呼び方)”、“哥们(gemen 友人同士の親しみを込めた呼び方)”のような呼称名詞や“你好(nihao こんにちは)”のような挨拶表現である(太字で示した部分、13例の内8例で、全体の61.54%を占めている)。

以上の考察から、改善要求発話の「切り出し部」において、日本語では「すみません」「ごめん」「悪いけど」などの恐縮の意を表明しながら注目喚起をする表現を多用するのに対して、中国語では“哥们”“亲”、“骚年”、“同学”“○○○(相手の名前やニックネーム)”などの呼称名詞や“你好”のような挨拶表現を多用することが分かった。この結果が、これまでの依頼表現の日中対照や、呼称、ポライトネスの日中対照に関する先行研究(浜田1995、ト2004、方・高2004など)と同様の傾向を

¹⁶ 相手の「名前」や「ニックネーム」のことである。

示している。

従来、この現象に関して、B & Lのポライトネス理論から解釈するのが主流であった。「日本語は対人的な距離が大きく、ネガティブ・ポライトネスが優勢であると言える。対照的に、アメリカ(とりわけ西海岸)の英語や、現代の中国語は、対人的な距離が小さく、ポジティブ・ポライトネスが優勢である。」と滝浦(2008:46)が指摘しているように、「すみません」「ごめん」「悪いけど」などの恐縮の意を表明しつつ注目喚起をする表現は、できるだけ相手の領域を侵犯しないようとする敬避的な遠隔化であり、ネガティブ・ポライトネス心理からの配慮である。一方、“哥们”“亲”、“骚年”、“同学”“○○(相手の名前やニックネーム)”などの呼称名詞や“你好”のような挨拶表現は、積極的に社会的距離を縮め、親密かつ好感を示す共感的な近接化であり、ポジティブ・ポライトネス心理からの配慮であると思われる。

筆者もこの解釈に同意はするが、ここで興味深いのは、なぜ日本語ではネガティブ・ポライトネスが優勢であるのに対して、中国語ではポジティブ・ポライトネスが優勢であるのだろうか、という点である。この優勢傾向の背後に、人間のものの見方とどのように関わっているのだろうか。

この疑問を解くために、以下は、意味構成の面から改めて改善要求発話の切り出し部に用いる表現形式を分析してみる。日本語母語話者が多用している「すみません」「ごめん」「悪いけど」などの恐縮の意を表明しながら注目喚起をする表現は、いずれも話者の発話時の感情活動を表す表現として理解できる。つまり、話者が、発話時において、自分の話を聞いてもらうのが相手に迷惑を掛けるので、すまないと思う気持ち、それから、これから言おうとする改善要求が相手の「権利や自由を侵害されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かすので、すまないと思う気持ちを、「すみません」「ごめん」「悪いけど」などの表現を通して聴者に伝えている。このように、「すみません」「ごめん」「悪いけど」などの表現が表しているもの(つまり、話者の感情活動)が「イマ、ココ」という時空制限が強いものである。時空条件が変わると、「すまない」という話者の感情活動が消えていく(あるいは変わっていく)のである。

一方、“哥们”“亲”、“骚年”、“同学”“○○○(相手の名前やニックネーム)”などの呼称名詞は、話者の発話時の感情活動を表す表現ではなく、相手の名前、相手との社会的関係などの客観的な存在を表す表現である。これらの表現形式が表しているものが恒常的な性質を持っており、「イマ、ココ」という時空制限が弱く、「イマ、ココ」でなくても、常に存在しているものである。例えば、「玲子ちゃん、ちょっと静かにしてくれない?」。この発話では、相手の名前を呼ぶことにより注目喚起をしている。「玲子ちゃん」は聴者に対する呼称で、発話時でなくても、例えば、明日彼女に会っても、「玲子ちゃん」と呼ぶことができるし、また発話場面が変わっても、例えば、感謝場面、謝罪場面でも、彼女のことを「玲子ちゃん」と呼んでも構わない。

以上の分析から、日・中改善要求発話の「切り出し部」に用いる配慮の仕方に相違が生じることの背後に、日本語母語話者は発話時の自己の感情活動を言語化する(主観的把握)傾向が強いが、中国語母語話者は相手との社会的・心理的距離を測り、相手の名前や相手との社会的関係など恒常的な性質を持つものを言語化する(客観的把握)傾向が強い、といった認知レベルでの営み(心的態度)が働いていることが窺えた。このように、日本語と中国語の話者による〈事態把握〉の仕方に好みの差があることが、改善要求発話の「切り出し部」に用いる表現形式に影響をもたらしていることが明らかとなった。

(3) 「終了部」

(32) 静かにしてもらえますか。すみません。

(33) 咱能小点声吗? 谢谢。

訳文: 声を小さくできますか。ありがとう。

例文で示したように、改善要求発話の「終了部」において、日本語では、「すみません」「ごめんね」などの謝罪を表す表現を用いるのが一般的である。一方、中国語では、もちろん“不好意思”(すみません)のような謝罪を表す表現が改善要求発話の「終了部」に使用することができるが、多く使用されているのが“谢谢(ありがとう)”“谢谢了哈(ありがとうね)”“谢谢了啊(ありがとうね)”などの感謝を表す表現である。特に、親しくない隣人に対する場面で、「終了部」に用いられている表現形式の

中、感謝の意を表す表現の割合が85.71%に達している。

「好ましくない現状を改善してほしい」という依頼の意思を伝えた後に、「謝罪」あるいは「感謝」の意を表すことが、相手との人間関係を良好に維持しようとする姿勢を示すことができる。この意味では、対人関係を良好に維持しようとする配慮の意識は日中間で共通しているが、その具体的な仕組みは、(34)と(35)に示したように両言語が明らかに異なる。

- (34) ご迷惑をお掛けして、すみません。
 (35) a 話を聞いてくれて、ありがとうございます。
 b 改善行為を実現していただければ、有難いです。

改善要求発話の「切り出し部」に用いる「すみません」などの表現形式と同様に、日本語母語話者の「終了部」に多用する「すみません」「ごめんね」などの謝罪を表す表現は、話者の発話時の感情活動を表す表現に理解できる。つまり、改善要求を表出したことが相手の「権利や自由を侵害されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かし、相手に迷惑をかけたため、話者が今現在すまないと思っている気持ちを「すみません」「ごめんね」などの表現形式を通して、聴者に伝えている。このすまないと思う気持ちは、「イマ、ココ」という時空制限が強く、時空条件が変わると、変化していくものである。

一方、中国語母語話者が多用する“谢谢(ありがとう)”“谢谢了哈(ありがとうね)”“谢谢了啊(ありがとうね)”などの表現は、二つの解釈ができる。一つは、(35) a に示したように、日本語の「以上です」という表現と類似しており、発話の終了マーカーとして、「話を聞いてくれて、ありがとうございます。以上です」という意を表している。もう一つの解釈は、(35) b に示したように、話者が「改善行為が実現された」といった未来に発生する可能性のある事態を先取りして、「注視点」を時間軸上の〈いま〉(発話時)ではなく、〈未来〉という時点(つまり、改善行為が実現された時点)の出来事に移し、〈未来〉の時点に発生する「聴者が改善行為を行った」という事態が自分にとっては有難いことであるため、聴者に感謝の意を表すこととなる。

この用法は、次の依頼場面の例にも見える。

- (36) 哪位朋友能教我英语, 初中的, 拜托了, 先跟你说声谢谢。(「百度知道」より¹⁷)
 訳文: 誰か私に英語を教えてくださいませんか。中学校の。お願いします。先にお礼を申し上げておきます。

この例は、中国の「百度知道」(日本の「Yahoo 知恵袋」に相当するサイト)から収集したものである。サイトに書き込みをするとき、読者が目の前にいるわけでもなく、そもそも、誰がその情報を読むのかも想像もできない。にもかかわらず、なぜ“谢谢(ありがとう)”という感謝の意を表す表現を使用しているのだろうか。それは、“先跟你说声谢谢”(先にお礼を申し上げておきます)の“先…”(～ておきます)という時間や順序を表す副詞に示したように、話者が「誰かが返事を書いてくれた」という〈未来〉のある時点に発生する出来事を先取りして、その時点での自分の感情活動を想定し、“谢谢(ありがとう)”という表現を使って言語化しているからである。

(4) まとめ

日・中改善要求発話の「切り出し部」「用件内容部」「終了部」に用いる表現形式を比較した結果、1)「切り出し部」:日本語母語話者が「すみません」などの恐縮の意を表明しながら注目喚起をする表現を多用するのに対し、中国語母語話者が「哥们」「同学」などの呼称名詞を多用する。2)「用件内容部」:日本語母語話者が求心的な授受補助動詞を用いた文型を多用するのに対し、中国語母語話者が動作主の意志を捨象できる能願動詞(願望、可能性を表す助動詞)を用いた文型を多用する。3)「終了部」:日本語母語話者が謝罪を表す表現を多用するのに対し、中国語母語話者が感謝を表す表現を多用する。といった、これまでの依頼表現の日中対照や、呼称、ポライトネスの日中対照に関する先行研

¹⁷ http://zhidao.baidu.com/link?url=t8vzKT0JtMhiMhpV1wU1uOJuWOH7LETDLWpuVI_jDca2LzQBwZw6WN_LkUAPZ8E43FiUhZGu2HzvhuYCr-dP9Es7juPoc8VOL9ScODF2BTK (2014年12月17日閲覧)

究(浜田 1995、ト 2004、方・高 2004など)と同様の傾向を示した。「切り出し部」と「終了部」の現象について、従来 B & L のポライトネス理論から説明することが多く、日本語母語話者がネガティブ・ポライトネス心理からの配慮を多用し、中国語母語話者がポジティブ・ポライトネス心理からの配慮を多用すると指摘されている。このポライトネス心理の相違が生じる原因について、従来、文化などの面からの分析が多かったが、人間のものの見方という内面的な要素からの研究は少なかった。また、「用件内容部」の「求心的な授受補助動詞」と「能願動詞」の対立現象について、B & L のポライトネス理論からは説明がつかねることがある。

そこで、本稿では、認知レベルでの営みの相違が言語間の配慮の仕方の相違を生じさせる潜在的な根源であるという仮説を提出し、「認知とポライトネスの接点」という新たな研究方法で、改めてこれらの現象を分析した。その結果、日中両言語とも一見異なる表現形式で配慮を示しているようであるが、その深層に、日本語母語話者は、「自己-中心的 (egocentric)」に事態把握を行い、「イマ、ココ」に執着する傾向が強く、発話時の自分の感情活動を表すことにより配慮する姿勢を示す、一方、中国語母語話者は事態そのものを重視し、「イマ、ココ」に執着せず、客観的な面(例えば、相手との社会的関係に基づいた呼称により注目喚起、客観的な理由を述べることにより個対個の対立を回避、改善行為が実現可能かどうかを尋ねることにより働きかけ)から配慮する姿勢を示す、といった認知レベルでの共通性があることが明らかになった。この結果は、池上 (2011b:318) の「言語が異なると、それぞれの話者による〈事態把握〉の仕方に好みの差があるということは、言語のいろいろなレベル、さまざまな側面について認められることである。」という論説の有力の論拠となり、日中対照研究に新たな方法論を示したのではないかと思われる。

5. おわりに

本稿では、自由記述型談話完成テストにより収集した改善要求発話を「切り出し部」「用件内容部」「終了部」の3つの部分に分け、「因果連鎖」と「事態把握」という二つの認知的アプローチから、改善要求発話における日中間の類型論的特性を考察した。さらに、その考察結果に基づき、日中間の配慮の仕方の相違と認知レベルでの営みとの関連性を検討した。本稿の主たる成果は、1)因果連鎖の「切片化の選択」及び「細密度」の分析結果に基づき、改善要求発話に見られる日中間の類型論的特性を明らかにした点、2)改善要求発話の各部分に用いる表現形式を考察し、日中間の配慮の仕方の相違を示した点、3)用例分析を通して、認知レベルでの営みの相違が言語間の配慮の仕方の相違を生じさせる潜在的な根源であるという仮説を検証し、ポライトネスの通言語的研究を行っていく上での新たな方法論を示した点、の3点に集約される。

本稿で試みたような、言語の認知レベルでの営みに注意を払いながら、表現形式の相違を手掛かりに言語間の類型論的特性及びポライトネスの相違を捉える対照研究の方法は、改善要求発話以外の発話行為を考察する上でも有効なアプローチとなる。

改善要求発話に見られる日中間の事態認知、時・空間認知に関する類型論的特性を明らかにするために、本稿は DCT という言語行動意識調査を通してデータ収集を行った。前文でも触れたように、DCT により得たデータは「話し手の頭の中にあるモデルとして、実際の相互作用の場で相手の反応に応じて変更や修正を加えられる前の、基本的にこういう出方をしたい、こう展開してしかるべき、と話し手が考えているような行動のイメージ」(熊谷 2000:97)を反映するもので、談話的なやり取りが現れない。改善要求のような会話では、たった一言で目的を達成するのではなく、繰り返しやり取りを行うことで、目的を達成するのが一般的であるため、今後、自然談話のデータを増やし、日・中改善要求発話の談話レベルの相違を明らかにしたいと思う。

謝辞

本稿の執筆に際し、筑波大学人文社会系の小野正樹先生、佐々木勲人先生、一二三朋子先生から貴重ご意見、ご助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。また、データ収集にご協力いただいた賈曉凡先生と王明輝先生にも深くお礼を申し上げます。

参考文献

池上嘉彦(2005)「日本語の中の‘Subjective Construal’」『日本認知言語学会論文集』第5巻, pp. 547-557

- 池上嘉彦(2006)「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『言語』35(5), pp. 20-27, 大修館書店
- 池上嘉彦(2011a)「日本語と主観性・主体性」澤田治美編『主観性と主体性 ひつじ意味論講座 第5巻』, pp. 49-67, ひつじ書房
- 池上嘉彦(2011b)「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」人工知能学会誌 26(4), pp. 317-322, 社団法人人工知能学会
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』東京大学出版会
- 奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」言語学研究会編『ことばの科学1』 pp. 181-212, むぎ書房
- 熊谷智子(2000)「言語行動分析の観点—「行動の仕方」を形づくる諸要素について—」『日本語科学』7, pp. 95-113, 国立国語研究所
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社
- 辻幸夫(2003)『認知言語学への招待』シリーズ認知言語学入門 第1巻, 辻幸夫編 池上嘉彦・山梨正明・河上誓作監修, 大修館書店
- 三上章(1970)『文法小論集』くろしお出版
- 藤堂明保・相原茂(1985)『新訂中国語概論』大修館書店
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996)「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」『日本語教育』88号, pp. 128-139, 日本語教育学会
- 浜田麻里(1995)「依頼表現の対照研究—中国語における命令依頼の方略」『日本語学』10, pp. 69-75, 明治書院
- 朴承園(2000)「『不満表明表現』使用に関する研究—日本語母語話者・韓国人日本語学習者・韓国語母語話者の比較—」『言語科学論集』第4号, pp. 51-62, 東北大学文学部日本語学科
- 平井睦美(1998)「不満表明に関する一考察：その表示規則に見られる文化の影響」『葛野』2, pp. 26-39, 京都外国語大学日本語学科研究会
- 方懋・高鹏飞(2004)「中国人と日本人における言語表現の異なり」『新潟産業大学人文学部紀要』第16号, pp. 151-161
- 卜雁(2004)「呼称におけるポライトネス心理考察—親族呼称の虚構的用法に関する日・中・英語比較—」『淑徳大学社会学部紀要』38, pp. 313-328
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』明治書院
- 李国玲(2014)「疑問形式による改善要求表現の日中対照—話者と事態との関わり方から—」『日本語/日本語教育研究』5, pp. 135-144, ココ出版
- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*, Oxford University Press. (邦訳:坂本百大訳(1978)『言語と行為』大修館書店)
- Brown, P. & Levinson, S. (1987 [1978]) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press. (邦訳:田中典子監訳、齊藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野寿憲・山下早代子訳(2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社)
- Grice, H. P. (1989) *Studies in the Way of words*, Harvard University Press. (邦訳:清塚邦彦訳(1998)『論理と会話』勁草書房)
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman. (邦訳:池上嘉彦・河上誓作訳(1987)『語用論』紀伊國屋書店)
- Ronald W. Langacker (1990) *Concept, image and symbol: the cognitive basis of grammar*. New York: Walter de Gruyter.
- Searle, J.R. (1969) *Speech acts*, Cambridge University Press (邦訳:坂本百大・土屋俊訳(1986)『言語行為』勁草書房)
- Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Second Edition, Blackwell (邦訳:内田聖二・宋南先・中達俊明・田中圭子訳(2000)『関連性理論』第2版 研究社)

参考辞書

『クラウン中日辞典』松岡栄志主幹、樋口靖・白井啓介・代田智明編修 三省堂出版, 2001